

---

# コードギアス～ロシアより愛を込めて～

スターリン万歳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「コードギアス～ロシアより愛を込めて～

### 【Zコード】

Z0696X

### 【作者名】

スター・リン万歳

### 【あらすじ】

皇暦2014年。本編では全く語られなかつたロシアの大地を舞台に、いま新たなギアスの物語が始まる。

凍土を穿つ砲弾の嵐、母親の名を泣き叫ぶ兵士、占領地では陵辱された市民の怨嗟の声が戦場に木霊する。

ここは優しい嘘なんてない唯一つ力だけが真実の世界。  
君は世界を壊せるか . . . . .

## 日本占領（前書き）

これはスレのもじコードギアスの世界にソビエト連邦があつたらを元にしています。

オリジナル要素も入れますが、大体が原作に沿つて書いていきたいと思います。

それでは本編をどうぞ。

## 日本占領

皇暦2010年

日本に埋蔵される膨大なサクラダイトの分配を問題とし、日本と超大国ブリタニアとで戦争が勃発。

世界のおおよそ三分の一以上を領土とするブリタニアの前に、日本は瞬く間に本土へと上陸される。

ブリタニア軍<sup>ナイツメアフーム</sup>新兵器KMFをもつて日本国土を電撃的に侵略したブリタニア軍を前に。

日本は僅か一ヶ月足らずで降伏した。

日本首相枢木ゲンブは自害して果て、「ここに日本は滅亡」する。

その一週間前・・・

ロシア連邦ウラジオストック港から夜陰を縫うようにしてロシア艦隊が出撃する。

強襲揚陸艦三隻、キエフ級重航空巡洋艦、モスクワ級ヘリ空母一隻、ミサイルフリゲート、駆逐艦、攻撃型潜水艦多数からなるロシアの極東艦隊は静かな夜の海を沸き立たせながら進んでいく。

極東艦隊ミヒャエル・グレゴービッチ提督は旗艦スラヴァ級ミサイル巡洋艦ヴァリヤークのCHCでじつと海図を睨みながら航路の計算を行っていた。

「同志グレゴービッチ提督、予定海域にあと三十分ほどで到達します」

「了解した、では予定海域に着き次第回頭しこれより作戦の第一段階に移る」

今回のロシア極東艦隊の出撃は樺太自由経済特区の邦人保護を目的と説明されているが、実際に艦隊は樺太の手前できびを返すように南へと針路を向ける。

この動きに慌てたのがブリタニア軍に九州から上陸され、近畿にまで防衛線を後退していた日本であった。

戦争前ブリタニアとの開戦が避けられぬと見た日本政府は各国との間で外交努力が行われたが、ロシア連邦とは不可侵協定を結んだばかりなのだ。

この明らかに条約違反の行為に日本外務省は大使館経由でモスクワに遺憾の意と説明を求めが。

結局それ以上のことには出来なかつた。

ブリタニア太平洋艦隊との海戦で日本の機動戦力は壊滅し残っているのは沿岸警備用の貧弱な艦艇ばかりであり、ロシア艦隊と真っ向から立ち向かえる戦力など残つてはいない。

そして遂にロシア艦隊が北海道日本海側の沖に姿を現す。

そして遮るものがない中悠然と上陸を果した強襲揚陸艦からは装甲車と戦車が吐き出され、北海道の大地にロシア軍が降り立つ。

モスクワ級を発したヘリボーンが函館千歳空港を瞬く間に占領し、シベリアを発した輸送機の編隊が降り立つ。

空港に取り残された怯える市民達を前に、ロシア陸軍機甲師団が輸送機の腹から姿を現し市街地を疾走する。

「こちら千歳航空基地、現在ロシア軍機と思われる航空機に爆撃を受けている。至急援軍を請う、繰り返す……」

北海道に展開していた日本軍の殆どを本土決戦の為引き払っていた隙を突かれた日本軍には、対して重装備など残ってはいなかつた。

「くそ、戦車や戦闘機相手にライフルで戦えつてのかよ……」

「わめいている暇があつたら呼び続ける、少しでも多くこのことを知らせるんだ」

必死に通信機の全チャンネルを開いて呼びかけるが、彼等の苦労が報われることはなかつた。

ロシア本土から出撃した爆撃機編隊が残存する日本陸軍の拠点を爆撃で壊滅しにし、残つていたのは最早彼等だけであつた。

それでも彼等は呼びかけるのを諦めず、通信塔にロシア軍歩兵がなだれ込むまで彼等の抵抗は続いた。

ブリタニア開戦より僅か一週間でロシア連邦から日本に突きつけられた要求。

北海道、東北及び佐渡島、能登半島にロシア軍の進駐を認め、「」。

事実上の宣戦布告であったが、近畿を突破され首都東京の前にまでブリタニア軍が日本は要求を呑まざる終えなかつた。

国際社会でもロシア連邦の非道に非難の声が集中するがロシア連邦は極東艦隊は北海道上陸から「」には新潟に上陸。

太平洋側にも姿を現したロシア艦隊の多方面上陸作戦を前に、日本軍は忸怩たる思いを抱きながら政府の命令とあつては後退していくしかなかつた。

新潟県某市、橋を挟み向こう側にはロシア軍から逃れる避難民での群れで「」た返していた。

誘導する警察や消防、軍の顔色は良くなく生まれ故郷を捨てなければいけない人々の中には悲しさの余り泣き出すものもいた。

家財道具一切をトラックや車に積め、人と車とで渋滞する端の向こう側にはロシア軍の姿がちらほらと見え始めている。

「なんでこうなったんだよ。政府の馬鹿やつ……。」

「おい、声が大きいぞ」

「つむせい、やってられるかよ。どうしてオレ達が生まれ故郷を露助なんかにくれてやらなくちゃいけないんだ」

避難民を誘導する為歩哨に立っていた兵の一人がライフルを橋の向こう側に向ける。

「見てるよ、絶対に俺達の故郷を取り戻してやる」

そしてライフルのトリガーに手をかけ、

「止める。発砲禁止されているんだぞ」

同僚の制止の声に兵士は力なくライフルを下げる。

その顔には苦渋の涙を浮かべ、何度も何度も

「チクショウ、チクショオおおお」

と唇から声が漏れ出した。

ロシア軍が日本に上陸した事を知ったブリタニア軍では本国の指示  
ゆえロシアには手出しならんと厳命を受けていた為当初の予定通り  
日本の首都東京を目指していた。

「しかし何でロシアは今になつて日本に戦争を吹っかけたんだ？火  
事場泥棒もいいところじゃないか」

トラックに揺られながら、爆撃され廃墟と化した町の中をブリタニア軍の兵士たちが他愛のない会話をする。

「お前そんなことも知らないのか。まったく俺がいい事を教えてや  
るよ」

同僚を呆れるような目で見たブリタニア兵はライフルを抱きななし身を乗り出して耳元に手を当て小声で囁つ。

「ふむふむ、へ～って！？それ本當か」

「馬鹿声が大きい」

幸いトラックが走る音で無知な同僚の声は同乗する兵士達には聞こえなかつたが、知つたかぶりの兵は冷や汗を流す。

「悪い、でもブリタニアとロシアが同盟だなんて信じられないよ。だつてつい此間だつてベーリング海峡で一悶着あつたんだろ？」「実際戦争が始まる以前から、いやブリタニア建国いろいろからロシアとの中は常に緊張関係にあつたといつていい。

前大戦で同じ連合国の中立場に立つたとはい、超大国並び立たず。

どちらも相手を霸権を握る為の最大の障害と見なし、「ことある」とにぶつかり合つているのだ。

「お前何にも分かつちゃいないな、それこそ政治だよ政治。表で喧嘩しても裏じゃ手を結んでいるなんてよくある話だ。第一今の皇帝陛下が火事場泥棒を許すような方ではないだろ？」

知つたかぶりの兵士が政治を語るが、彼も実際そんな事があつたとは知らないし全て彼の想像のながだ。

「ま、オレ達庶民には全く関係のないことだ。お上のことはほつといて俺達は戦争のおこぼれに預かるづじやないか」

兵士は同僚の肩に手を回しながらニヤリと笑みを浮かべる。

この戦争もあと一週間くらいで終わる。

そうなれば彼等は故郷に帰れるし、その前に占領地で一稼ぎする」とも出来る。

東洋系は意外とブリタニアでは人気があるのだ。

何がとは言わぬが、勝者はなにをしても許されるというブリタニアの国是に従い彼等もまた勝者の権利を存分に行使するつもりでいた。

こうしてブリタニア開戦から僅か一ヶ月、枢木ゲンブ首相が自害し日本はブリタニアに無条件降伏した。

占領された日本はエリア1-1としてブリタニア植民地として併合され、以後日本人たちは国と名前を奪われ國士を分断された。

## 偉大なる書の国

### ロシア連邦

ヨーラシア大陸の過半を領土とし東欧、中東、北アフリカに多くの衛星国を抱え、ブリタニアと世界を二分する超大国である。

その首都モスクワクレムリンの大統領執務室で、この国の大統領であるウラジーミル・ーチンは日本の占領が完了したとの報告を受けていた。

「同志、チャシェネンコフ」

クレムリン赤の広場を背にした執務室の中には、ウラジーミル大統領ともう一人の男の姿があった。

男は一步前に進み出て、背筋を伸ばす。

「同志チエシェネンコフ、君はこれから直に日本に飛び現地のブリタニア軍と交渉に入れ。極東軍も場合によつては動かしてよい、ブリタニアと我ロシアの占領地への不可侵を誓わせるのだ」

スラヴ的顔立ちをしたチャシェネンコフはのっぺりとした髪を更にオイルで塗りつけたような脂ぎった髪をてからせながら緊張した面持ちで言つ。

「同志ウラジーミル閣下、場合によつてはと言いますが一体何処までのこと御望みでしょつ」

彼としてはブリタニアとの交渉等今まで何度も行つてきて別にそれには緊張しているわけではない。

彼が恐れるのは今日の前の男、この国いや世界の半分の支配者たる男の腹のうちを汲み取らないばかりに肅清されていった者を知っているからだ。

その為、自分が考えていることとウラジーミル閣下の考えが同じかどうか、それこそが最も重要なのだ。

「決まつていい、我ロシアは卑劣な攻撃によつて瀕する日本を救う為に軍を出したのだ。よつて我ロシアの意思は日本の独立だ、この為には何としてもブリタニアの介入を未然に防ぐ必要がある」

決まつた。

今この瞬間より男の発言は何を犠牲にしてでも必ず成し遂げなければならぬといふことがチャシエネンコフの中で決まつた。

チャシエネンコフは喉かカラカラになりながらも、搾り出すよつてして何とか一言だけ言う事が出来た。

「はつ、必ずや同志閣下」

話はそれで終わつた、チャシエネンコフ恭しく一礼して部屋を後にする急いでクレムリンの長い廊下を足早に駆けていく。

一刻も早くこの場を離れたかつたことと、今から自分にKGBの監視が24時間張り付くことを知つてゐるからだ。

閣下の重要な「」意思を妨げるものがいよいよ護衛するといつ点で一つ、もう一つは失敗した場合チャシェンコフを処分する為に護衛といつ名の監視が彼を駆り立てるのだから。

チャシェンコフが部屋を出ると、徐にウラジーミル閣下は革張りの高級椅子から立ち上がり窓の外から見える赤の広場へと目を向ける。

そこにはソビエト当時では考えられないほど人と活気で溢れ、ロシアが最早各国の後塵を拝する一流国ではない証に思えた。

ウラジーミルは二三十年のことと思いを馳せる。

ソビエト社会主義の限界、それによるソビエトの崩壊と衛星国の離反。

国家崩壊に付入りハイエナのように群がる列強。

その危機の中、偉大なる同志ゴルバチョフ大統領は崩壊するソビエトを再生させ、ことさらブリタニアの脅威を強調することで国内を纏め上げた。

その舵取りが如何に困難だったか、ブリタニアが本格的に介入すればこの国は間違いなく地図から姿を消していただけだ。

国内の反対勢力を政治の影で抹殺し、対ブリタニア穏健派と曰っていた男の突然の態度の豹変は国内外を大いに震え上がらせた。

ゴルバチョフ大統領亡き後も歴代のロシアの指導者たちは非常に困難な時代に大きな舵取りや方向転換を幾度となく強いられその度に国民に大きな出血を強いた。

しかし、それも今は過去のこと。

現在のロシアは嘗ての威光を取り戻すどころかそれ以上に発展している。

北欧、東欧は勿論、モンゴル、中東のイラン、イラク、アフガン、パキスタン、トルコ、シリア、アラブ、エジプト、アフリカの社会主义国家を取り込みキューバやアフリカ、東南アジアそれに南アメリカ（南米）での革命闘争はまだ終わってはいない。

中華連邦、EUに向こうに回して世界で唯一ブリタニアと単独で渡り合える国力。

これが嘗て欧洲にアジアと蔑まれ、社会主义の停滞による経済の衰退で何百万もの餓死者を出した国が僅か一十年の間でここまでの大躍進を遂げたのだ。

今思えば奇跡と言つてもいい。

そしてウラジーミルは自分がその幸運を勝ち取つたと自認している。

そう、全てはあの日から始まったのだ。

ソビエト崩壊の前夜私が見つけたのだ、世界の全てを掴み取る力を。

「いかんな、少々昔のこと思い出しそぎたか」

ウラジーミル閣下はそう呟くと頭を振つて昔の記憶を頭の中から消し去る。

「さて、シャルル皇帝はどう動くか。いや動かせるかだな」

ウラジーミル閣下はもう一度だけ窓の外を一瞥すると、再び政務を行つ為執務室の机へと戻つていった。

## 交渉テーブル

皇暦2010年東京近郊ブリタニア軍野営地

日本がブリタニアに降伏し一週間が経過し、本来なら条約を取り交わし正式に日本の降伏とブリタニアへの主権移行が行われ戦後処理もたけなわ・・・という訳でもない。

実際ここ一週間、ブリタニア兵が唯の一人たりとも東京の足を踏み入れていないと、いう事実が、このなんともいえない微妙な緊張感を孕んだ空気が流れ。

その理由はあのずと川向こうの町に田を向ければ分かる」とだ。

現在ブリタニア軍は東京から五キロの地点で野営地を建設し待機しているが、愛知方面からもロシア連邦極東陸軍が展開し非常に微妙な均衡状態が続いている。

ところも、日本降伏の前後にロシア連邦が突如として首都東京の邦人保護を名目に以前の条約には含まれてはいない茨城、千葉、埼玉に進駐した。

これに驚いたブリタニア軍はロシア軍を牽制する為に急遽進軍を早め首都東京を包囲。

ロシア兵を一兵たりとも入れない構えを見せる。

緊張する両軍の間ではあわや日本を舞台にブリタニアとロシアの戦争かと実しやかに囁かれていた。

各国から集まつた報道陣や観戦武官も大使館経由で逐一情報を本国へと送り、ブリタニア首都ペンドラゴンでも外交官が慌しく動き何時でも全軍に出撃を命じられるよう皇帝シャルルは玉座のまでどつしりと構えて腰掛けていた。

だがここでロシア連邦が動きを見せる。

大使館経由で現地での会談を申し込む代わりに一部ロシア軍の包囲を解くと送った。

その面をペンドラゴンにつめる外交官が緊張の面持ちを浮かべながら皇帝シャルルに報告し、その裁可を仰ぐ。

ただ皇帝陛下は無言で頷かれたと、この時皇帝付き書記官は書いた。

この無言の意味が何を含んでいたのか、後々まで興味は尽きないが皇帝の許可を得たことで両軍のとも何時でも戦争を始められるように準備しながら両軍とも使節団を派遣する。

ブリタニアの代表とロシアの代表とが双方少數の護衛を連れたのみで両軍の中間地点で張られた天幕に入していく。

まずお互い儀礼的な挨拶から始まり、早速会談が行われた。

「ではロシアの今回の進駐は侵略の意図はなく邦人保護と旧日本政府との合意のもとという訳ですな。それを信じじると?」

ブリタニアの代表団が疑いの目を持つてチャシェネンコフを見る。

「ええ、既に条約を取り交わしここにちゃんとした証拠もあります。これは日本降伏前に交わされた物で国際法に照らし合わせてなんら疑いのあるものではありません」

ぬけぬけとチャシHネンコフが団太く正当性を主張するがのがロシア的な外交術の一つだ。

「ですが些か軍の規模が大きいのでは。これではロシアが日本とブリタニアとの戦争に浸け込んで火事場泥棒を働いたようにしか見えませんが。そもそも日本降伏の日本の主権は我国に譲渡されている、ここは最早ブリタニアの地だ、ロシア軍は即刻撤退すべきだとブリタニアは主張する」

ブリタニアの外交官が高圧的な態度に出るが、実際彼等は恐れてい るのだ。

もしかしたら日本軍とロシアとの間で密約が交わされ東京を包囲中のブリタニア軍を更に取り巻くロシア軍が、東京を守る日本軍と内外で呼応すればブリタニアは一たまりもない。

実際に戦争になればブリタニアは負けはしないが、むざむざ敵の策に嵌つたとして皇帝シャルルからどんなお叱りを受けるか。

勝者には寛大で敗者にはことのほか厳しい方でいられる皇帝陛下の顔を思い出しブリタニアの代表は身震いする。

「その理由につきましてはブリタニア軍の占領地での”活躍”はよく知っておりますからな。邦人に万が一がないようこの程度は必要な処置ですよ。お互い占領地で”事故”は起こしたくはありませんからな」

チャショーンコツの言ひ活躍とは無論占領地でブリタニアが行ひ苛烈な統治のことだ。

実際問題ブリタニアの植民ととなつた国の邦人がどのような処遇になるか、それこそブリタニアの胸先三寸で決まるのだ。

そして事故とは嘗て第二次世界大戦末期、ドイツを占領したソビエトとブリタニアがドイツの高速道路アウトバーンで行われた戦車戦を敵と誤認した事故として処理したことに由来する。

以来占領地での他国との戦闘は大概この事故という表現で済ませられている事への皮肉である。

憎憎しげなブリタニア外交団はそれでもなお追求の矛先を緩めない。

「我ブリタニアは国際法を尊重する国家だ。」しかしもロシアの占領地での活躍は聞き及んでいる、貴國のほうこそ事故を起こしたがっているのではないですか？」

「ほほう、ではお聞きいたします。此度のブリタニアと日本との戦争は一体どのような理由で開戦なされたので？」

国際法には宣戦布告は正当な理由無しには行えないと記載されている。

今回ブリタニアは無論宣戦布告文を出しているが、それを鵜呑みにするようなやからはここにはいない。

「それは、我ブリタニアはパックスブリタニアの為世界の新たな

秩序の構築と・・・・・

正直に侵略の為とは言えない辺り、ブリタニア代表の雄弁な声が段々と尻すぼみになつていいく。

「ほう？ではブリタニアは世界を統治する唯一の国家と。それはおかしな話だ、我ロシアは無論中華連邦もEJも貴国の統治下にあるところのは初耳ですな。今の話を聞いたらさぞかし驚くでしょうね」

今のは間違いなくブリタニアの失言だが、まあ実際問題EJも中華連邦もそんなことは百も承知ではあるがいまここにいるブリタニア代表団の発言はそのまま国際的なブリタニアの発言として記録される。

つまりは今この瞬間ブリタニアはEJと中華連邦、そしてロシア連邦に喧嘩を売ったのだ。

「いや違う今の発言は・・・・・・」

「書記官、今の発言を確りと記録してくれたまえ。早急に本国に送らなければ」

意地の悪い話だ。

実際こんなことでEJも中華連邦もブリタニアとは戦わないが、外交のカードとして使うだろ？。

そのことを分かつてゐるブリタニア代表団の顔は皆青白くなつている。

この分だとすんなりとブリタニアとの不可侵を結べそうだとチャシェネンコフはほくそ笑みながら交渉を続けた。

## 北海道札幌

ロシア軍に占領された北海道や東北地方だが以外にその統治はスムーズに行われていた。

ロシア軍がよく起こす占領地での活躍もなく、日本が降伏したという混乱はあるものの比較的小限に收められていた。

この地方の市民感情としては複雑の極みだが、ブリタニアによつて日本人を失うよりはロシアの方がまだ信用できる。

実際各市町村の行政はそのまま機能しており、一定の制限を設けられてはいるがここは戦火とは程遠い平穏な日常の風景が残つていた。

ここに一人の男がいる。

実島キサオ、国会議員であり枢木ゲンブ政権時では党内で頭角を現していたやり手である。

ゲンブや京都グループがブリタニアに国を売り身の安全を得たように実島もまたロシアを引き入れることにより日本という国の存命を

彼なりに図つていた。

ロシアと日本との関係は良くも悪くも互いに気が抜けない間柄といえる。

北方領土問題や軍事的圧力、サクラダイトの分配を巡り常に争つているようで択捉島を経済特区として認めるなど中々一概にこれと言えないのが日本とロシアの関係だ。

だがブリタニアとの関係が悪化することで状況は一変する。

ブリタニアによる世界制覇パックスブリタニアを掲げる皇帝シャルルは日本へと矛先を向けた時ロシアは大きな危機感に包まれた。中国の諺で「亡びれば歯寒し」で日本の存在がブリタニアの圧力を分散させていたし、アジアにおけるブリタニアの植民地化の防波堤の役目を担っていた。

それが崩れようとしている時、ロシアでも大きく意見が分かれた。

ブリタニアと同調して日本を攻めるという案と、外交的な手段には訴えるが様子を見計らい静観に徹するかだ。

実島はロシアの動搖を注目し枢木ゲンブにロシアを日本に引き入れるよう進言する。

これは万が一の保険という意味を含ませているが、ゲンブま唯で日本をくれてやるような男ではない。

ブリタニアでの地位を約束されても矢張りいざと成つたら掌を返さ

れる恐れもある。

その為にも亡命先としてロシアを選ぶように仕向けその代わりとして北海道と東北を敢て手薄にしてロシアに割譲するということだ。

日本を舞台にブリタニアとロシアとが対立すれば日本の元首相であり京都グループとも繋がりの深いゲンブの価値は増す。

だが実島もここで終わるようなことはしない。

極秘文書でロシアとの密約を交わす傍らに戦後日本の独立を盛り込んだのだ。

ロシアとしてもアラスカとベーリング海峡、更にアフリカでブリタニアと国境を接する関係上日本にアジアにも一つの戦線を抱え込むのはリスクがいる。

そこを突いて敢て日本を独立させブリタニアとの緩衝地帯として用いるよう実島は文章のそれとなく匂わせ自身もまたそれを実現する為に動き始めた。

東北、北海道を万が一の国土での戦場となつた場合後背地として活用するという名目で上陸が予想される九州四国中国地方から工場を疎開させ資源の備蓄も開始する。

その逆に日本軍を九州四国中国地方に移しロシア軍との衝突を必要最小限に抑えるよつ手を加えた。

人と資源工場を移し、短い期間の中予定を上回る効果を上げた疎開はことさらにマスメディアでブリタニアの恐怖を煽った影響もあり、

着実に実島のシナリオどおりことは進行していた。

日本とブリタニアが開戦した時、既に実島の姿は首都東京から消え北海道札幌に移した資産と共に戦後日本の独立のさい組閣の陣容を詰めていた。

だが、戦争は実島が思つたよりも早く決着してしまつ。

ブリタニアが投入した新兵器ナイトメアフレームの戦果が声高に主張されるが、実島はブリタニアの強硬な進軍の理由がもしかしたらロシアと日本が交わした密約が漏れた可能性があると見た。

本来なら中国近畿地方でブリタニア軍に抵抗しつつジリジリと後退しその隙にロシア軍を引き込み東京まで進駐させるつもりであった。サクラダイトの世界最大の埋蔵量を誇る東海をブリタニアに、関東をロシアとに分け戦後独立の経済的基盤を確保する予定が狂つてしまつた。

急遽予定を変更しロシアが強硬な策に出るが、実島としても「これは状況に任せるとしかないと考え暫く札幌で事態を静観していた。

ブリタニアとロシアが東京を包囲して会談を行つてゐる間も実島は東北北海道を取り纏めに奔走している。

実際このタイミングでは戦争にならないとの読みで動いてゐるが果たしてブリタニアがどう動くか。

それだけが気がかりでならなかつた。



## 東日本共和国（前書き）

段々架空戦記臭がしてきました。

## 東日本共和国

ブリタニア帝国ロシア連邦との会談の結果ロシア軍の邦人保護を名目とした一部軍の東京進駐を認める代わりに現在包囲しているロシア軍を撤退すること。

東北、北海道、などの領有については後日別途に会談を設けること。東京においてはブリタニアの利益を損なうようなことをしないこということで一応の締結を見て、ブリタニアロシア両軍の奇妙な混戦部隊が東京へと入っていく。

国会を占領したブリタニア軍は早速日本の降伏文章にブリタニア軍司令官自らが調印し、まるで狸にでもつままれたかのような顔をした議員等を前にさつわと皇帝シャルルへの報告の為に国会を後にした。

こうして色々とケチが付いて回るような終わり方をした今回の戦争だがブリタニア軍とロシア軍が互いににらみ合っている貴重な時間の間に実島キサオは東北と北海道を纏め上げ九州中国四国近畿から流れてきた難民を東北から北海道へと受け入れを開始していた。

条約が発行するまでの短い間だけだが、難民を受け入れると同時に日本軍の残存兵力も同じく吸収した東北北海道は独立へ向け確かにその一步を前進した。

ブリタニア軍が占領した日本はエリアーと名を変えブリタニアの11番目の植民地として日本は完全に滅んだかに見えた。

皇曆2010年十月

改めてロシア連邦と日本の領土分割についての話し合いがもたれた  
がお互いに事実確認と相互承認だけに終わり、両者とも唯一陸続き  
で国境を接することで軍事的な緊張感が高まる事が世界的に懸念さ  
れた。

だが、今回の戦争は一転二転を繰り返したがその年の最後の月には  
驚くべき宣言が出された。

### エリア11トウキョウ租界近郊のゲットー

ブリタニアによって併合され日本人といふ名前と国を失い今はイレ  
ブンと呼称される日本人達は、頃垂れる様にして廃墟と化した街の  
彼方此方で焚き火を集め暖を取つていた。

十一月だといふのに満足な水も食糧もなければ燃料も無い中、寒さ  
に震える手足をすり合わせて寒い冬を越す一家の姿。

ここには日常を奪われ平穏をなくした者達が寒い冬の街で帰る所も  
なく彷徨い続ける。

ラジオから流れるのは廃墟と化した街で未だに施設が生きている放  
送局から流れる軽快な音楽が逆に彼等の惨めさを際立たせる。

巨大な壁の向こう側、現在ブリタニア軍に占領されている首都東京  
の中心地では駐留するブリタニア兵が彼方此方で暖かいコートに身  
を包みながら歩哨に立っていた。

すると突然ラジオの放送が切り替わり、軽快な音楽の代わりに男の声が聞こえてきた。

「どうせブリタニア軍が気まぐれにラジオ局の真似事でもしているのだろうと、皆一応に別のチャンネルに切り替えようとしたその時。

「以上を持ちまして私実島キサオ日本のブリタニアからの独立と初代東日本共和国首相に任命されたことをここに宣言するものであり・

・・・・・」

「まなんと言つたか。

随分と遠い日々に思える彼等がまだ日本人として胸を張つてそう呼んでいた頃の名前日本が再び彼等が聞く事になるとは。

ゲットーでラジオを聴いていたもの達は全員食い入るようにラジオの耳を傾けヴォリュームを最大まで上げた。

この放送はTV、ラジオ、ネットを通じ全世界に放送されており無論トウキョウ租界の臨時総督府でもこの放送をTVを通して見ていた。

来年にはブリタニア帝国皇子クロヴィス殿下を新総督としてお迎えする準備に明け暮れていた総督にはこの放送はまったくの寝耳に水であった。

「いつたいこれはどういつことだ。直に放送局と突き止めて即刻放送を中止させろ」

「いえ、それが場所は特定したのですがロシア軍占領下にある札幌市内なのです」

「な、なんだと。直に皇帝陛下にご連絡を、急げ！！」

ブリタニア王都ペンドラゴンの王座の広間には緊張の面持ちを浮かべた貴族たちが集まっていた。

玉座に座り苛立たしげな様子を隠すべくもなく、シャルル皇帝はTVモニターに映る実島という男、ではなくその後ろに控えるロシア兵に守られた一人の男に注目していた。

ブリタニア軍情報部が突き止めた男の名はエヴァグニー・ヴォリソビツチ。

ロシア連邦GRU所属であり、主に欧洲で活躍していた諜報員でありロシアで最も冷酷な男とも呼ばれている。

他にこの男の詳しい経歴は漠然としているが何枚かの写真のうちゴルバチョフとの繋がりを持ち今ではウラジーミルの裏の顔として存在している。

そんな男が東日本共和国独立に関わっているとすれば、それは独立はロシア連邦のシナリオどおりということだ。

シャルル皇帝はそれが不機嫌でならないが、彼の真の目的の前には

些末な事でしかない。

だが、このままで面白くはないのも事実。

ロシア連邦に対する制裁を考えつつ放送は終わった。

東日本共和国の独立宣言だがロシア連邦次いでEJ、中東アフリカの衛星国が次々と支持を表明した。

中華連邦は静観の構えを見せ残るブリタニアは真っ向から対立するような事はせず直に軍を派遣できるよう準備したが、日本に駐留する極東軍とロシア太平洋艦隊、北方艦隊が出撃しブリタニアを牽制する。

ブリタニアとしては決して認められないが、これ以上対立を広げても益は無しと見たシュナイゼル皇子兼帝国宰相は一定の落とし所を模索することとなる。

だが皇帝シャルルの意を翻意することは適わず結局ブリタニア帝国は東日本共和国を黙殺し、無言の圧力でもって日本の独立を否定した。

東日本共和国はロシア、EJから経済援助を受け取りブリタニアに対する自由と独立を掲げ以後アジアの壁として活用されることとなる。

## 東日本共和国（後書き）

ロシア連邦のナイトメアフレームがいつか……。

一応案としてはフロンティアショーンのヴァンシラーを導えているが  
果たしてギアスの世界観に合つかどうか。

## 東西分断

北海道札幌市内、東日本共和国建国宣言から内閣総理大臣となつた実島キサオのもとには、日々様々な案件が持ち込まれその激務に耐えながらふと昔のことを思い出していた。

つい、半年も前の事なのに何年も前のように懐かしく感じられた日々。

### 枢木ゲンブ

ワンマンではあり国家よりも自分の保身を優先するような奴だったが、それでも首相になつたその手腕は確かだつた。

若い時は事あるごとに奴と対立したが、いつの間にか奴の勢力に取り込まれいて、私もそれを不思議と嫌とは思わなかつた。

こうして首相になつてみて始めて分かつたが、これは想像以上に重責だな。

奴が生きていたら丸ごと放り投げて本来組織の調整役である私は裏方に徹していたかつたが、まあ今となつてはそれも適わんか。

東北は戦争によるブリタニア軍の爆撃を殆ど受けなかつたと事が幸いして、経済の基盤が最初から整つている。

まあ、有名どころのシリコンバレーはここにあるしブリタニアも戦後に手に入れたのが唯の焦土ではぬみが少ないからな。

キヨウトグループのメンバーを何人か引き込んだのもいい。

流石に富士一帯のサクラダイト採掘を手がける桐原財閥は無理であつたりしたが、現地でブリタニアに対して背面服従したりとまあ色々と仲良くはやっている。

「ンンン

部屋の扉をノックする音で実島は思考の海から現実へと戻り、居住まいを正して、

「どうぞ」

と言った、

「失礼します。首相、国境を警備隊から至急首相宛てに連絡が届きました」

部屋に入ってきた秘書官から報告書を受け取りぱつと目を通して、私はそこに書かれていることに愕然とした。

「これは・・・本当なのか!?至急関係機関と連絡を取つて事実確認を取つてくれ。それと万が一これが事実の場合対策会議を開く必要もある」

「ロシアの方には何と言いますか

「恐らくロシアも現状静観するだろ?が、万が一に備え動くかもしない。最悪もう一度ロシア軍が大挙して東日本に渡つてくるぞ」

東日本独立のおり国家の主権と自決を尊重するとしてロシア軍は国境警備用の一部軍を残しシベリアへと引き上げていた。

旧日本軍を糾合し、ある程度纏まとた戦力と対ブリタニア戦の経験豊富な指揮官を得た為、ロシアから供給された一世代前の兵器だが何とか軍としての形は保つてはいたが、ブリタニアの再度の侵略に耐えられるほどではない。

もしここで再びロシア軍の介入を招けば、今度は日本全土が焦土と化しかねない。

実島は部屋を出ると、もう一度手元の報告書の写真を一瞥した。

「全く、これだから選民主義者は・・・」

何枚もの写真に克明に写る東日本共和国とブリタニア占領地（日本側の呼称）との国境に築かれる巨大な建造物。

そこで酷使されるナンバーズに落とされた同胞と、国境を塞ぐ巨大な壁とがこの国の未来を暗示しているようでならなかつた。

## ナイトメア解析（前書き）

今回は作者お得意というか文才のない作者が文字数稼ぎに書く大まかな流れと解説の話になります。

## ナイトメア解析

ロシア連邦モスクワ近郊の工場では、現在日本より回収されたブリニア<sup>ナイトメアフレーム</sup>アの新兵器KMFを分解解析を行っていた。

無論、ブリタニアの新兵器といつこともあり、ブリタニア本国の防諜は完璧と言つてよかつたが、戦場で偶々撃破された或いは鹵獲された物を極秘裏にロシア国内に運び、現在国家の総力を挙げてこのブリタニアの新兵器の解明を行つている。

工場で働く研究者や技術者達はまるで新しいオモチャを与えられた子供のようにナイトメアフレームに群がり、彼方此方に取り付いては装甲を剥がしたり中の計器から情報を吸いだしたりしていく。

元々旧ソビエト連邦から歩行兵器の案は長らく検討されており、悪名高きソコロフ研究所のシャゴホッド、グラーニン研究所のメタルギアなど実際に試作された兵器も多数存在していた。

現在でこそ停滞気味であったが、その当時はあらゆる地形を走破し主に山岳地において大量にミサイル、ロケット攻撃可能な兵器とした歩行戦車として開発が進んでおり、その基礎技術があるロシアでは比較的早くナイトメアフレームの解析が終了する。

そして、ブリタニアが作り上げた新兵器の性能に国防軍関連は戦慄した。

日本の山岳地攻略用に開発されたと思われたが、ファクトスファイアによる高度な索敵性能、スラッシュユハーケンを用いた攻撃にも移動にも使えるワイヤー強度と機体のパワー。

そして何よりも一際目を引いたのが外付け高軌道駆動輪ランドスピナーであった。

地形を問わず走破する高性能と高機動、小型ゆえに驚くべき旋回能力は今まで陸戦の王者であつた戦車をも一部で凌駕する性能を持っている。

軍民あわせてこの脅威に対抗する様々な手段が模索されそのそして満場一致で決まった案が政府宛に出された。

曰く『ナイトメアはナイトメアをもつて制すべし』

ウラジーミル大統領はこの案を全面的に受け入れこうしてロシアでナイトメアフレームの開発がスタートした。

次いで現行の技術そのままでも製造が可能なプリタニアのナイトメアフレーム「コードネームグラスゴー」を生産し日本や各地の衛星国に配備することも同時に決定された。

この「コピー品」のナイトメアの多くは日本に渡り現地で量産されたものは無頼と名づけられ東日本共和国正規軍のみならず、反プリタニアリスト達によつて大いに運用されていく。

## ナイトメア解析（後書き）

原作よりも早く世界にナイトメアフレームが広がります。

それとこの世界観ではシャゴホッドやメタルギアは山岳地での大火力を保有した歩行戦車の代わりです。

現在では全て解体されてしまいますが、場合によっては物語に登場させるかも知れません。

## ロシア戦（前書き）

行き成り交渉とか準備段階とかすっ飛ばして即開戦。

正直話を考えるのが面倒だったなんて言いません、舐めたマネをした奴には速攻宣戦布告がブリタニアクオリティー！！！

ボラー連邦のテーマをかけながら書いたせいかなんだか物凄いことに・・・・・。

## ロシア戦

皇曆2013年

突如として神聖ブリタニア帝国がロシア連邦へと宣戦を布告。

同時にベーリング海峡に展開していた艦隊がロシア連邦海軍極東艦隊と激突し両軍とも百隻を越える近代戦争類を見ない大海戦で戦いの幕は落とされた。

ロシア連邦の衛星国である東欧ワルシャワ条約機構軍は臨戦態勢を発し、中東アフリカ諸国も是に倣う。

前々からブリタニアの侵攻を予想していたロシア連邦極東軍はブリタニアの上陸は避けられないとして、ウラジオストック港死守を念頭に置いた防衛ラインを構築し、それと同時にシベリア鉄道を使つてロシア陸軍百万の増援を得た。

質量共に揃つたブリタニアに対し、ロシア軍お得意の大量ミサイルによる飽和攻撃での殲滅を行う極東艦隊。

上空では制空権争いを賭けて両軍のありとあらゆる航空機が舞い、海中では潜水艦隊が音も無く忍び寄りながら激しい戦闘を繰り広げる。

ブリタニア海軍旗艦

「つづむ、イージス艦の処理能力限界を超える飽和攻撃を仕掛けるとは。流石は腐つてもロシア海軍か。予想以上に手強い」

「提督、ですが敵の攻撃がミサイルである以上何れ息切れは免れません。敵の波状攻撃が止み次第反撃に転ずるべきかと」

「いや参謀、それではこちらの被害も馬鹿にはならん。それにロシア潜水艦隊は未だに健在だ。それを放置してはベーリング海峡からの上陸など万が一揚陸艦隊に何かあつた場合皇帝陛下に顔向けが出来ぬ。少し早いが例のアレ使ってみるか」

「アレですか。しかし本当に使い物になるのでしょうか？海戦の影響で海中は相当荒れていますが」

「かまわん。どうせここを乗り越えなければシベリア上陸やましてやモスクワなど夢のまた夢だ。多少の犠牲はやむ終えまい」

「はっ、了解しました」

ロシア極東艦隊

絶え間なく射出される矢じりと対艦ミサイルの嵐。

噴射炎で甲板が焼け爛れるかのような壮絶な光景がそこには広がっていた。

「同志ブリュネンコ提督、あと三十分ほどで全艦隊のミサイルが底を付きます」

「分かった、それでは三十分後予定通り最後の総攻撃を仕掛け我艦隊は一度補給艦隊と合流する」

と、そのときソナー員の緊張した声が響く。

「ソナーに感、これは・・・一体なんだ？」

「どうした、報告は明瞭にせよ同志」

「申し訳ありません同志參謀閣下。現在ソナーに正体不明の反応を四つ五つ、八つ・・・全部で十六確認しました。速度からして低速の魚雷のようですが」

「それなら捨て置け、万が一の場合にはひらの対潜ロケットの餌食にしてくれる」

だが、この時の判断が極東艦隊の運命を左右した。

ブリタニア軍の水中用ナイトメアフレームポートマンの改良型であるフロッギングマンは、予備のポートマンを函にして艦隊へと接近していたのだ。

「よし、連中はまだこちらに気がついてはいないな。ロシアの士官共に海は勿体無いと教えてやれ」

フロッギングマンの背中に背負いつゝに装備されたブリタニアの新兵器スーパー・キャビンテーション魚雷が発射される。

三十六機のフロッギングマンからそれぞれ一本ずつ放たれた計七十一本の魚雷が時速100ノットを越える猛烈な速度で迫り回避する間も無く次々とロシア艦隊を海の底に沈めていく。

突如として海中に100ノットを越す魚雷が現われたことでロシア艦隊は動搖し、魚雷を回避する為に散会してしまったのが裏田にてしまづ。

この隙に艦隊の底に取り付いたフロッグマンは海面に躍り出て、通常のマニュピレーターの代わりに三本の突起が付いた爪で駆逐艦に取り付き甲板へと這い上がる。

「食らえつー！」

艦橋にスラッシュ・シユハーケンの一撃を受けた駆逐艦は戦力を喪失し、何機かはファランクスや速射砲に迎撃されて振り落とされるも艦隊は大混乱に陥っていた。

### ブリタニア艦隊

「フロッグマンが予想以上に働いてくれています。提督ご命令を」

「よし、今だ全軍総攻撃を開始。ロシア海軍を撃滅しろ」

次々と放たれる対艦ミサイルに対艦装備をぶら下げた攻撃隊が空母から出撃する。

ロシア艦隊も負けじと対空砲火を打ち上げ、迎撃するも懷に入り込んだフロッグマンの攻撃に気を取られ効果的な迎撃が出来なかつた。そこに弾幕を突破した対艦ミサイル群が艦隊に迫りくる。

この攻撃で少なくない被害を出したロシア艦隊は不利を悟り撤退を決意。

追撃をさせないためにも最後の足掻きとばかりに対艦ミサイルによる攻撃を命じウラジオストックへと徹底していく。

### ロシア艦隊提督

「たとえ私が肅清されようとも、ロシア艦隊は再び蘇る。その時こそブリタニアの地に今度は我等の旗が掲げられるのだ」

去り際にそういう残したと伝えられた提督は敗戦の責任を取り処刑されるも、以後ロシア海軍はブリタニアに対抗する為より大規模な軍拡を行うこととなる。

## ロシア戦（後書き）

次回シベリア上陸初のナイトメアフレーム同士の戦いです。

因みにロシア軍のナイトメアはフロントミッションのザーフトラ、ジンズ、オコのどれかから選んでいいのかと考えています。

## 東シベリア上陸

ベーリング海峡海戦に勝利したブリタニア軍は少なくない被害を受けつつも損傷艦を後方に下げての国ロシア連邦シベリアの地に遂に足を踏み入れた。

上陸からKMFの活躍で覚しく瞬く間に橋頭堡を確保し、本国でローラーアウトされたばかりのザガーランドの性能も上々であった。

「これならいける」

上陸の指揮を取っていたブリタニア海軍提督はこの時そう思つていた。

そしてそれはある時点まで事実であった。

東シベリアを席巻したブリタニアKMF軍団は、制空権を握ったブリタニア空軍の支援のもと破竹の勢いでシベリア奥深くまで進軍を続けた。

シベリアの街々を植民地に置いたブリタニア軍はこの時油断していた。

自分達に勝てるもの無しと。

「同志ポポフスキーコミ。東シベリア全エリアから軍の引き上げが完了しました。また同時にシベリア鉄道より増援が明日にでも到着します」

「つむ宜しい。ブリキ共に本場の雪合戦がどういう物か、思い知らせてやる」

顎鬚を蓄え、ロシア帽を被つた司令は野生的なその風貌の顔を獰猛な獣のようにゆがめ笑う。

「<sup>ローライナ</sup>IJの母なる大地を蹂躪した償い、死を持つて償うが良い。全軍出撃、反撃の時は来たぞ！！」

ポポフスキーコミの号令と共に、ウラルの峰峰に陣を構えたロシア軍が遂に真の姿を現す。

## ブリタニア軍シベリア攻略軍G-1ベース車内

ブリタニア皇帝シャルルよりシベリア攻略を任せられているバーミンガム侯爵は鼻歌交じりに上機嫌で特別に皇帝より賜れた特別製のこのG-1の車内に設けられた豪奢な椅子に座っていた。

「ふふふふ、我バー・ミンガム家開闢より早三百四十七年、遂に遂にこのアルフレッド・フォン・バー・ミンガムの名が偉大な神聖ブリタニア帝国の歴史に名を刻む時が来た！！」

はははは、と高らかに笑うバーミンガム卿の姿に流石に慣れたのか車内にいるブリタニア軍人は誰一人として氣にも留めず自らの職務を全うする。

その様子に別段不機嫌になるでもないバーミンガム卿は今日は何時もよりも上機嫌なのが災いして後三十分ほどは講釈を止めない様子だ。

だが流石は腐つてもブリタニア軍。

レーダーに異変を察知したブリタニア兵が直さま報告し、バーミンガム卿も先程までの馬鹿殿様見たいな様子はなりを潜め、ブリタニア軍を率いる将帥の顔を見せていた。

「何事か」

威厳のあるバーミンガム卿の声が車内に響く。

「はつ、哨戒に出ていた部隊の幾つかが連絡を断つてているとの報告が来たと同時に強力なジャミングが発生しました。現在ECMを全力稼働中ですが複数方向からの電波で思つよつに部隊間の通信が取れなくなっています」

「成程、存外ロシアも戦上手という訳か。だがこちらの耳と目を潰したからと書いて勝った気になつては困るな。直に全軍に警報を鳴らせ、伝令を出して各部隊との連携を密にする。それと敵のECM発生地点を特定し ECMFを差し向ける」

「イエス・マイ・ロード」

バー・ミンガム卿乗艦の特別仕様G-1ベースはゆっくりと車輪を動かし、前線指揮の為前線へと進んでいく。

だが事は彼等が予想していた以上に早く進行していた。

既にこの時前線にはロシア軍のKMFが現われ前線は混乱状態に陥っていたのだ。

### ブリタニア軍前線

「クソッ、どうしてアサルトライフルが効かないんだ！？」

グラスゴーに乗るパイロットがアサルトライフルを両手で保持しながら銃を乱射するが、目の前の奇妙な形をしたKMFは一向に応えた様子が無くこちらに大型ライフルを放つ。

機体を緊急回避させた衝撃で、コクピット内がミニキサーのように起き回されるが何とか意識を保ちもう一度相手をよく観察する。

「なんだってんだよ！－！アレは」

彼は前線で哨戒部隊に属していた。

今日もシベリアの肌を刺す寒い朝の中、針葉樹林地帯を三機のKMFと共に進んでいた。

三機とも通常兵装であるアサルトライフルと、スタントンファーを装備し。

なら装甲車一一台、歩兵ならば一個分隊を楽に葬れる火力を持つていた。

田の出と共に始まつた哨戒は、その田は何も無く終わり駐屯地へと帰還しようと通信を入れたとき異変は起きた。

「こちら第三十三哨戒大隊所属スカウト、通信兵聞こえるか。もう一度言つこちらスカウトどうぞ」

「どうだ繋がつたか?」

「駄目だ何度も呼びかけているが一向に繋がらない。そつちはどうだ」

「こちらもまだ、まさか三機とも通信機が故障なんて無いよな

通信機越しに聞こえてくる僚機の不安そうな声がコクピットに響く。

既に本体と連絡が取れなくなり三十分が経過し通信機をこのまま使い続けていけばあつという間にバッテリーが上がってしまう。

これが最新鋭のサザーランドなら性能も向上しているが、生憎と今ここにいるのはグラスゴーが三機。

ブリタニア初の本格的KMFだがお世辞にも操縦性はいいとは言えず、特に背中に背負うような形の箱型コクピットはキューポラのスキマから冷たい風が入り込み、ヒーターを全開にしても寒さで手が凍るほどだ。

「おい、何か見えたか」

現在は三機とも通信以外に必要最低限の電力をカットし、針葉樹林に紛れるようにして簡単な偽装を施していた。

そのためレーダーもファクトスファイアも使えないため、態々外に出で双眼鏡とライフルを持ち、態々周囲の警戒をするはめになつていてる。

「こつちは今のところ異常が無いよ、それよりもコリヤ本格的にヤバイな。何時もの哨戒任務だから食糧もエナジーも弾薬予備を合わせて三日間しかないと。それにここは敵地だ、迂闊に火も焚けん」

双眼鏡を覗き込み、レンズの光が反射しないようシート被り周辺の草花を少しつけて簡単な偽装を施したブリタニア兵は、遅めの朝食代わりの硬い固形栄養食を噉んでいた。

「うげ、それじゃあコーヒーが飲めないじゃないか」

「お前よくあのコーヒー飲めるな、不味くて飲めた代物じゃないぜ」

双眼鏡から目を離し、後ろの男に振り返つてヤレヤレヒーフジエスチャーをする。

「いいんだよ、俺はカフェイン中毒なんだ。コーヒーがなければ生きてい氣ねえよ」

「へいへいっと……？」

再び双眼鏡を覗き込んだ男は針葉樹林の中キラリと鈍く光るのを見

逃さなかつた。

「おこーーー今直ぐＫＭＦを起動しろ。不味いことになつたぞ」

その様子から最悪の事態を連想したブリタニア兵は直ぐＫＭＦに乗り込み刺しつぱなしにしていた始動キーを入れる。

「早く、早くしろノロマめーー！」

悴んだ手で素早く機体の始動プロセスを行いつつ、何時もなり何気ないその行動が今は一秒でも惜しい。

「おい、早くコクピットを閉めろーー！奴等歩兵を連れてるぞ」

インカムから未だに外で双眼鏡を覗き込む男に向けて叫ぶ。

「もういい、お前も早くＫＭＦ立てーー！？」

だがその言葉を言い終わる事は出来なかつた。

双眼鏡を田に痕が付くほど押し付け倍率を最大まで上げたその向こうに奴等は見えた。

明らかにブリタニア軍の歩兵装備とは違ひ兵装、ゆつくりと周囲を偵察しながら進む様子と先程の鈍い光を放つた装甲車の機関砲が旋回し警戒している。

数はざつと二十名から三十名、装甲車のタイプと歩兵の装備からして威力偵察か何かかと思ったが、しかし疑問が浮かぶ。

開戦からブリタニア軍は破竹の勢いで既に東シベリアを席卷しロシア軍本隊はウラル山脈の向こう側に撤退したはずだ。

なのに妙に敵の装備が整いすぎている。

今まで戦ったような奴等とは違つ明らかに訓練を受けたその動きに、もつと別の目的があるのでと一瞬双眼鏡から目を離した事が彼の生死を分けた。

『もつとい、お前も早くＫＭＦにつく！？』

発砲音、大型コイルガンの特徴的な風切り音と正体を見極めようと身構えた事が運悪く、発射された大型ライフル弾を生身で受けた彼らは永遠に相手の正体を知る機会を失つた。

KMFに登場したブリタニア兵は、男の最後の瞬間を見る事無く既に偽装を解き散開する。

「クソッ、一人やられた。露助めよくもやりやがったな」

「落ち着け、奴等はこっちに気付いた。増援を呼ばれる前に早く逃げるんだ」

「でもよお」

だが、そつは問屋が降ろさない。

ロシア軍歩兵は直さま対KMF用の対戦車ロケットを装備すると匪い込むよつに走り出す。

肩に担いだ RPG 口ケット弾が尾を引き爆炎を散らす。

しかしブリタニアの KMF には対人用の機銃が装備されている為迂闊に歩兵は近づこうとはせず、装甲車も遮蔽物に身を隠すようにして時折機関砲を撃つて牽制する。

グラスゴーを操り、遮蔽物からライフルの銃口だけを向け牽制程度に一連射しなんとか方位網の突破口を見つけようがあがく。

激しい銃撃戦の最中、突如としてロシア歩兵が雪解けのように撤退していく。

「おい、こいつやあどうこう事だ？」

「さて分からん。だが今のうち」遺体だけでも回収しておこう

死んだ仲間の遺品を持ち帰ろうとしたその瞬間、けたたましいモーター音が針葉樹林にこだまする。

戦場に似つかわしくない、いや異質なその音と共に一本の木が切り倒された。

ブリタニアの KMF と同様人型のフォルムを持つが、首の部分がなく小さな隙間からカメラの部分が僅かにカエルの顔のような印象を受ける。

曲面を多様したボディーに、鳥のような三本爪の足、貧弱そうで対弾性と空力を考慮されたラインは一目見るからに機動力がありそうに見えた。

ブリタニアのKMFと違う点を上げるとすれば顔の部分と、ランドスピーナーが装備されていない点、そして何よりも手に持つ巨大なチェーンソーの存在がブリタニアのKMFとは決定的に違う無骨な禍々しさのような雰囲気を醸し出している。

「クソッ、今日は本当に厄日だぜ」

一機のグラスゴーが同時にライフルを構え、異形の人型兵器と対峙し、今ここに史上初のKMF同士の戦いが行われようとしていた。

## 東シベリア上陸（後書き）

ロシアの栄えある最初のKMF「ザガーフトラ」と「トリー」のアイドル。テラーンです。

KMFとの違いはラングスピーナーの代わりに足裏のホイールによるローラーダッシュ。市街地における三次元機動よりも野外戦においての機動力を追求した設計。

スラッシュユハーケンはオミットされており、コクピットも外に張り出した箱型ではなく機体内部に格納する方式を取っている。基本武装はそれほど差は無いが、この時点で両肩にハードポイントを設けているため将来的に武装の幅が広くなっている。

次も何か出して欲しいという感想がなければこのままザガーフトラ製のもので勧めていこうかなと思っています。

## シベリアの戦い

パトロール隊がロシア軍KMFと遭遇したのと時を同じくして、ブリタニア軍前線に突如としてロシア軍機甲部隊が襲い掛かる。

圧倒的投射量を誇る野戦自走砲大隊の援護の元ロシア軍歩兵が浸透する。

突然の奇襲で慌てふためくブリタニア軍の混乱を更に助長させるようロシア軍KMFアバローナが戦線を蹂躪する。

「歩兵には構うな。このまま敵陣奥を突っ切るぞ」

ロシア軍第五十五機動歩行兵器大隊隊長イラー・イワノフ大佐はアバローナの上位機であるヴィーザフのコクピットで次々に指示を出す。

「ロケット大隊に砲撃支援を要請、敵陣地を吹き飛ばして突破口を開く。ブリキ野郎のKMFの出現情報に注意しろ」

右手に装備した大型ライフルを撃ち手持ちロケット砲所謂バズーカランチャーが敵を粉砕する。

朝食前のブリタニア軍は炊き出しを行つてゐる為火災が発生し、煙で満足な司会が確保できない中唯逃げ惑うしかない。

だが、そんな彼等に遂に待ちに待つた援軍が到着した。

十機のグラスゴーと四機のザガーランドがロシア軍KMFに銃を向

ける。

「つーー！」

だが、放たれたライフルの弾は全てロシア軍の強固な装甲の前に阻まれ牽制以上の効果は上げなかつた。

「なんて固い奴だ。散会して後ろを取れ、ランサーを装備している機体を援護しろ」

だが流石は精強なブリタニア軍、ライフルが効かないと見るや接近戦を果敢に挑み、個人の技量が反映される乱戦に持ち込もうとする。

## 野戦司令部

### ブリタニア軍防衛線

ブリタニア KM ナイトメアフ

F レーム

ロシア軍・KM F ナイトメアフ

====

## 装甲車

## ロシア軍歩兵

### ロシア軍自走砲大隊

「ブリタニア軍のKMFを確認、新型のザザーランドの姿もある。全機対KMFフォーメーション」

第五十五大隊はイワコフ隊長の命令で直さま陣形を組み替える。

両手に分厚い盾のような鉄板を持つ機体が部隊の前に立ち、その後ろに隠れるようにKMGが付く。

重装備とは思えない軽快な機動性でブリタニア軍KMFとぶつかるロシア軍KMF大隊。

前衛が敵の攻撃を受け止めつつ、迂回し側面から攻撃しようとしたグラスゴーを後方に陣取った四脚型のKMFがスナイパーライフルで狙い打つ。

前衛が敵を分断し、側面に回るKMFを後方が狙い打ち残りを包囲殲滅する。

常に相手よりも数で上回るよう計算された動きにブリタニアKMFは初のKMF同士の戦闘ということもあり勝手の分からない戦いで見るも無残な姿を晒す。

それでもサザーランドを「えられた流石にエースか指揮官クラスは、スラッシュュハーケンを前衛の盾に打ち込み引き寄せ相手の体勢を崩させ狙い打つ」という方法で戦果を挙げるも。

それ以外のKMFはライフルが効かないということで平静を失い部隊としては使い物にならない。

悔しいかな、KMFはブリタニア以外に作り出せないと驕った事の影響がここに来て出でてしまつ。

それでも相手を一機一機撃破し、一応の面目を立てたブリタニアKMFは直さま後方に撤退し、史上初の大規模KMF戦はロシア軍に軍配が上がる。

「よし、撤退する連中は追わなくていい。今は野戦司令部を落すことに集中しろ」

「了解」

この後イワコフ率いる第五十五大隊は野戦司令部を落とし、その功績によりロシア軍KMF初の勲章を授かることになる。

この戦いで戦線を後退せざるを得なくなつたブリタニア軍は苦渋にまみれながらも本格的に逆襲の機会を伺うことになる。

## 灼熱の氷海

G - 1ベースが前線に到着する前に既にブリタニア軍敗北の報を知ったバーミンガム侯爵は一敗地に塗れながらも名誉挽回の機会を伺うため前線を後退させ戦力の再編を図った。

帝都ペンドラゴンでもブリタニア軍の敗走の報は直さま廻き皇帝シヤルルは崩壊する戦線を押しとどめるために更なる増援の派兵を決定。

ブリタニア全土から集められた延べ五十万もの兵力がベーリング海峡を船団を率い渡航する。

直さまそれを察知したロシア極東潜水艦隊は即座に全艦を出撃させブリタニア軍輸送船団へと襲い掛かる。

ウラジオストックに籠るロシア艦隊を包囲するブリタニア軍の包囲網を潜り抜けた潜水艦隊は、北海艦隊から派遣された北極海を通り合流した潜水艦隊と共に各地で壮絶な海戦を繰り広げる。

「魚雷一番から八番放射線状に発射!!」

「ソナーに感。水中投下音三、四、六、十!!」

「機関最大潜航。振り切れ」

「対潜ヘリ部隊が補給に帰艦します」

「ソナーに反応!! 方位・・・・!! 全方位から魚雷が」

「緊急回避！－！」

「駄目です間に合いません！－！」

轟音と共に荒波渦巻く冷たい海中へと泡立ちながらイージス艦が沈んでいく。

水中では人知れず潜水艦が僅かな亀裂から入り込んだ海水が瞬く間に船に満ち、鋼鉄の棺桶と化した潜水艦がベーリング海峡の底へと沈む。

「くつ、戦況を報告！－！」

「敵潜水艦百隻からなる包囲網は以前突破できていません。既に大型輸送船五隻、中型輸送船二十八隻が被弾傾斜し救援を求めています」

「残った戦力は」

「本艦を含め駆逐艦八、ヘリ空母一、巡洋艦三です」

「当初三十隻を越える艦隊が僅か数日でこれか・・・・・・」

「－－海中で注水音。早い、スーパー キャビンテーション魚雷です」

「これは回避できん！－！総員対シヨック」

駆逐艦のC-HWSが曳光弾の尾を引きながら海面を打つ。

幾つかの魚雷は光弾に絡め取られ船団手前で水柱を上げるが、それでも迎撃できなかつた魚雷が船団へと突き刺さる。

「まだだ、まだ終わっていない！！更にスーパーキャビンテーション魚雷を五番から八番発射。タイフーン級は水中発射ミサイルで止めを刺してやれ」

ロシア海軍潜水艦のなかで火薬庫と称されるタイフーン級超大型潜水艦はロシア軍最高の静粛性を誇り二十基のミサイルサイロ、八門の魚雷発射管、世界中を無補給で潜水航行できる航続性能から戦略単位として位置づけられている。

現在では更にタイフーン級の次世代型としてボレイ級が開発中であり配備が開始されれば質量共に最強の戦略ミサイル攻撃型潜水艦隊が誕生する。

タイフーンかた発射された二十基ものミサイルが尾を引きながら船団へと迫る。

既に邪魔な駆逐艦戦隊を壊滅させたロシア潜水艦隊は止めの一撃として船団中央部で炸裂した。

従来のミサイルとは比較に成らないほどの巨大な爆発が二十箇所同時に起こり生き残りの船団を含め海上は灼熱地獄と化した。

だがブリタニア軍もやられてばかりでは無い。

直さま対潜装備の攻撃機、対潜ヘリが戦場に到着し魚雷を投下する。

流石に空中の敵相手に分が悪いロシア潜水艦隊は直さま撤退しよう

とするが戦場に急行したブリタニア海軍攻撃型潜水艦が急襲し、海戦は混戦の様子を見せていた。

二週間かけて行われた海戦の結果、ブリタニア軍の増援を阻むのと引き換えに極東潜水艦隊は壊滅。

虎の子のタイフーン級も一隻撃沈されるが、ブリタニア軍も外征艦隊能力を大きく削がれ、この結果に激怒したシャルル皇帝により軍の上層部が軒並み更迭され新たに軍の体制の一新が図られた。

ロシアでも今回の勝利とは言いがたい結果にウラジミール大統領は不機嫌になつたが軍部は大統領の関心を買う為にシベリア極東軍に更なる攻勢を命じるはめと成った。

## 溶ける大地

極東軍区総司令官ポポチエフスキイ大将はクレムリンからの命令を忠実に実行に移す為に更なる増援と物資の補給を要請し、それが裁可されると共に作戦計画の立案も同時に進行していた。

「先ずは現状からだが、ここシベリア軍区ブリタニアがエリア 12 などと言つふざけた名前が付いた地を奪還する。戦線各地にとげのように突き刺さったブリタニアの突出地点を両翼から締め上げるようにして包囲殲滅。作戦前の準備攻勢として一ヶ月間の砲爆撃を予定している」

ポポチエフスキイ大将は作戦の概要を移したモニターを切り替え、別の地図を映し出す。

「第一段階として北海に停泊中のリムファクシ、シンファクシ両艦からの長距離巡航ミサイルによる敵後方への攻撃、<sup>ナイトメアフレ</sup>装甲機動歩兵師団第三、第八、第六は十一機師（T-90及びT-95を中心として機甲師団十二個の総称。極東軍の切り札とされる）と共に敵戦線を突破蹂躪しヤースカまで進軍。敵は戦線を立て直す為に南に戦力を集中するが今度は北側のベオルグラードから南下し敵をここチエールスペースに包囲しこれを殲滅する」

モニターの一点から赤い線がブリタニア軍の戦線を突破しつつもわき腹を抉るようにして北上し。

青い線と点で表示されるブリタニア軍がヤースカに殺到するとき北側のベオルグラードから黄色の点か矢印が出てブリタニア軍の方を寸断する。

典型的な両翼からの包囲殲滅だが、広大なシベリアを維持する為に薄く長く普請しなければならないブリタニア軍にとって突破力に優れる機甲師団とKMFとの連携は正に天敵であった。

「以上が作戦の骨子だ。何か質問はあるか」

「同志総司令官殿、この作戦ですとスピードが命です。作戦までの準備期間と戦力集中を加味すると敵に我々の意図を気付かれてしまうのではないでしょうか」

「同志ミハエル。それは全て計算のうちに入っている。シベリアの冬に慣れていないブリタニア軍はまず間違いなく消耗する。そして我々にとつて母なる大地の化粧はそのまま我々を姿を隠す偽装となる。敵に気付かれることなく戦力を集中しそして敵が弱り春になったとき奴らの目の前には我らロシア軍一百万の軍靴が聞こえることだろう」

「はつ、同志閣下。自分が短慮がありました」

「では大体の方針は決まつたな。詳細は参謀に任せせる」

「うしてロシア極東軍の反攻作戦が着々と進んでいった。

## ナイト・オブ・ラウンズ

ポポチエフスキー将軍の作戦は上手く行つた。

大地の子であるロシア軍人にとって、軟弱なブリタニア兵など取るに足らず、各地で寸断包囲殲滅し、急速にその失地を回復していった。

虎の子の十一機師はその突破力を遺憾なく發揮し、ヤーヌスカ五十キロの地点にまで迫つていた。

同時に、ロシア軍が対ブリタニア戦を想定して作られた地下ネットワークから武器を供給された民兵が後方で激しいゲリラ活動を行い、ブリタニアはエリアー12全域に混乱が広まるのを唯見ていることが出来なかつた。

バーミンガム侯爵もゲリラの凶弾に倒れ、指揮権を受け継いだ参謀はただ手をこまねく事しか出来ず、ブリタニア軍の醜態に益々激怒したシャルル皇帝は遂に帝国の誇り、ナイト・オブ・ラウンズの投入を決定する。

派遣されるのはナイトオブワニビスマルク・バルトシュタイン、ナイトオブファイブホープ・マゼラン、ナイトオブテンルキアーノ・ブラッドリーの三人であり、帝国の力と誇りの象徴であるラウンズを一つの戦線に同時に三人も投入する事にいかにシャルル皇帝が本気かを物語つっていた。

並びに、帝国宰相シュナイゼルを総司令官として派遣するなど正にブリタニア最強の布陣でロシア戦に臨んだ。

シャルル皇帝の命を受け直に準備を整えたシュナイゼルとラウンズ達は援軍を引きつれシベリアに上陸。

そこからブリタニアの反撃が始まった。

各地に宣戦の綻びをラウンズを投入して塞ぎ、混乱するブリタニア軍をシュナイゼルが立て直すまでシベリアの全戦線をほぼ三人のラウンズだけでカバーするなど、その獅子奮迅の活躍にブリタニア軍の士気は大いに上がり、またロシア軍が予想したよりも早く混乱を收拾したシュナイゼルは全軍に総反撃を命じる。

本国で開発されている第六世代の試作品を手にラウンズ達が前線を切り開く。

圧倒的力、最早英雄伝説がそのまま現代に蘇ったかのような光景に、誰しもが羨望と畏敬と恐怖の念を抱かずには入られなかつた。

結果、ポーチェフスキイの反攻作戦は失敗に終わり、シュナイゼルも補給の兼ね合いから前線は再び膠着状態へと陥つた。

皇曆2015年

シベリアの短い春攻勢に出たシユナイゼル率いるブリタニア軍はロシア軍を駆逐し、ウラル山脈要塞の麓にまで追い詰めた。

シベリア軍区総司令官ポポチエフスキイはこの失態で肅清され、後任にはモスクワ第三親衛軍より派遣されたゲオルギウス大将が就任した。

このままいけばウラル山脈要塞を突破されロシア平原へとブリタニア軍が流れ込むのは時間の問題かと思われた。

此処に来てEヒト中華連邦がブリタニア、ロシア双方の間に立つて和平工作を行つた。

EUにとっても中華連邦にとっても共にロシア連邦は脅威ではあつたが、逆にこれ以上ブリタニアが大きくなるのも困るというもの。

それ故に此処で一寸手打ちにする事で又再び旧大陸と新大陸の膠着状態を取り戻そうと画策したのだ。

まだまだブリタニアそしてロシア双方共に余力を残していたが、折りしもこの時期ブリタニア各植民地で反乱が勃発。

この裏でKGBが糸を引いているのは明白であつたが、追い詰められた鼠がどんな手段に出るか。

ブリタニアという獅子に対して鼠では役不足に見えるが、その相手が熊だつたら。

どちらにしろこれ以上の戦線の拡大は上策では無いと判断したシュナイゼル皇太子や、シャルル皇帝も遺跡の確保といつ最低限の目的を果した為和平交渉の席に着くことを決め。

ロシアも又、このままでは重要な資源地帯であるウラル一帯を失いかねないと判断した結果双方の思惑が一致し和平交渉の席に着くこととなつた。

## 分断日本

この極東の列島がそう呼ばれるようになつて久しい。

東西に分断された日本はエリアー、東日本共和国の一いつに別れ唯一超大国同士がこの地上で国境を接する場所となつていた。

そして今日、分断された日本の丁度両国の中間地点でブリタニアとロシアとの和平交渉が開かれていた。

中華連邦、EUの工作と戦争当事者両者の思惑の一致もあり奇跡的に交渉の席に着く事が出来たが、しかしそれは一步間違えば再び戦争が再燃する可能性を秘めていた。

会議が始まつて最初の一週間は比較的何事もなく平穏に進んだが、しかし、和平条約の具体的な内容に入り途端暗礁に乗り上げた。

ブリタニアとしてはウラル以東の地は当然のものとしてアリューシヤン列島、及びウラジオストック港の割譲。

及び東日本からのロシア軍の撤退を盛り込んだ条約を突きつけた。

是に対し、ロシアも負けじとブリタニアの条件を全て跳ね付け、逆にアラスカの割譲を要求し、並びに賠償金及びエリアー11を即刻開放して日本の独立の回復を盛り込んだ条約を叩き付けた。

双方譲らず、議論は平行線どころか今までの平穏が嘘だつたように荒れ始めた。

実質、ブリタニアはどう考えていたか分からぬが、この時ロシアではワルシャワ条約機構軍の再編成が終わり、シベリア鉄道を使って続々と兵力がウラル山脈へと集結していた。

更に、南米とアフリカで同時多発したテロや独立闘争が激化し、その火消しは到底植民地軍の手に余るものであった。

植民地の反乱がこれ以上長引くようではブリタニアの土台そのものが揺れかねないと貴族達は思い、また頻発するテロと反乱はブリタニア皇帝シャルルへの不満へと繋がった。

そもそも現皇帝シャルルは血で血を洗う凄惨な内戦を経て皇帝の座につき、弱肉強食の論理をもって世界征服を推し進めてきた。

だが常に強者は孤高であるが如く、ブリタニアは国際秩序から半ば孤立し、強権的なシャルル皇帝の政治は保守的な貴族からはどうにも煩わしいものであった。

だが、腐つてもブリタニア。

皇女コネリアを各地の反乱討伐に向かわせ、ブリタニア全軍に戦争再開の準備をさせると同時に、ロシアに最後の外交攻勢をかけた。

アリューシャン列島と東日本からのロシア軍撤退を諦めるとしてブリタニアは賠償金の取り下げ、及びこの条約を和平ではなく休戦条約に改め実質現状維持の方針を打ち出した。

この破格の譲歩は世界の外交筋を大きく賑わせたが、ロシアは直に飛びつくような事はせず、ブリタニアとギリギリの崖っぷちの攻防を続ける。

そして . . . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0696x/>

---

コードギアス～ロシアより愛を込めて～

2011年12月28日22時45分発行